

追悼

永安幸正先生を偲んで

足立 智孝

平成十九（二〇〇七）年九月の研究センターゼミの最中にもたらされた、思いがけない永安先生の訃報に接し、驚きとともに、ひどく落胆した。心が空虚になり、ほんやりと遠くを見つめると、目をくりくりさせ、にこやかに、いつも刺激的なお話をしていただいた永安先生が浮かんだ。「ああ、先生とは、もうお話できないのだ」と考えると、悔しさと寂しさが入り混じった、なんともいえない感情が肚の奥底から湧き上ってきた。先生は何度も入退院を繰り返していたので、今度も退院されてまた元気なお顔で「足立さん、研究の話聞かせてください」と声をかけていただけのものと思っていた。先生には、研究センターではマインリティーな理科系という共通したバックグラウンドを持つためなのか、大変気に懸けていただいたように思う。また先生の研究へのご関心は大変に広範囲かつ深遠であり、私の専門であるバイオエシックス研究にも精通しておられたので、一緒にお話させていただく時には、いつも私には思い浮かばない視点をご教示くださり、新たな研究テーマを与えられた。早すぎる先生の旅立ちには、ただ残念でならない。永安先生とのお付き合いは、十年余りと決して長いとはいえないが、記憶に残っているいくつかのエピソードを交え、先

生との思い出を綴りたいと思う。

永安先生と私が初めてお話しさせていただいたのは、平成八（一九九六）年三月五日だった。モラロジー専攻塾の卒業を控え、早稲田大学の木村利人教授（当時）の下で本格的にバイオエシックス研究を始める明確な目標が定まったときだった。立木教夫先生の紹介で、当時モラロジー研究所の研究部部長を務められていた永安先生の研究室でお会いしたのだった。先生は矢継ぎ早に専攻塾でまとめた卒業論文のこと、これからお世話になる木村利人先生のこと、バイオエシックスを学ぶ上での必読文献をいくつか挙げられ、「柏に来ることがあればいつでも僕の家に泊まればいい」とおっしゃり、ご自宅の住所と電話番号をいただいた。必読文献のメモは今も引き出しにしまっている。メモを頼りに永安先生が推薦された図書を少し紹介すると、カント『純粹理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』『道徳形而上学原論』、ヘーゲル『小論理学』、アリストテレス『政治学』『ニコマコス倫理学』、トマス・アキナス『神学大全』、速水滉『論理学』、九鬼周造『偶然性の問題』、その他法哲学分野と科学哲学分野の文献が記されている。あれからすでに十年以上にもなるが、先生の推薦図書のすべてを読破したといえないことを、この場を借りて先生に告白しておかなければならない。

その後永安先生には、立木先生と一緒に監訳されたトム・L・ピーチャム著『生命医学倫理のフロンティア』（行人社、一九九九）で一章を翻訳担当する貴重な機会を与えていただいた。一九九八年当時、私はアメリカのワシントンDCにあるジョージタウン大学ケネディ倫理研究所に留学していたので、アメリカから草稿を日本に送った。その後しばらくして永安先生からワシントンのアパートにFAXが届いた。FAXには、草稿にたいする過分な言葉とともに、留学の成功を願う先生の温かい言葉が達筆な文字で記されていた。そ

の当時は、異国の地で将来への不安を抱えた生活をしていたので、先生のFAXには大変に勇気付けられた記憶がある。

永安先生と近くでお話させていただくようになったのは、モラロジー研究所に奉職し始めた平成十三（二〇〇一）年一月からであった。一月十日には、当時も引き続き研究部長を努められておられた先生の研究室に入り、長い時間、先生といろいろなお話をした。最初はアメリカでの留学生活のことを話題にした記憶がある。私の話じつと耳を傾けて聴いていた後に、先生からも自らのイギリスやインドでの留学体験のお話を伺うことができた。先生は、留学で何より学んだことは、「勉強の仕方」であったと言われた。教授が学生に対してどんな要求を出すのか。学生はその要求に答えるために、どんな勉強をするのか。それらを身近に体験することができ、また自分がよいと思う勉強の方法を実践してみながら、高いレベルでの自分の勉強方法を確認することができる、というようなお話をされた。先生の勉強方法はどんなだろうかと、文献や原稿がところ狭しと並べられた先生の研究室を見渡しながら想像していると、そんな私の疑問を押し量るように、先生は、「足立さん、これからは二つの仕事を同時に並行して進めることを考えなさい」とおっしゃった。不器用な私は、一つの仕事を終わらせてから、次の仕事に取り掛かることしかできないと考えていたのだ、そんなことはできるのだろうか、驚いた。「今も、二つの原稿を同時に書いている」とおっしゃった先生は、「難しいと思うかもしれないが、できるようにする。まず、この仕事は、どの場所で行うのかを決めて、仕事をする空間を作るといいですね」とにやかな顔で教えていただいた。この机では、この仕事をを行う、向こうの机では、この仕事を行う、自宅ではこの仕事をする、決めるといい、とおっしゃったのである。先生の研究室には、いくつか机が置かれていたが、その机の周囲の書架にある文献を見ると、こ

ちらはビジネスエシックス、あちらは歴史論などと仕分けされて並んでいた。空間で区切って脳をその机で行わなければならない研究テーマのモードに切り替えるのである。同時並行して三つも仕事を進めると、脳の中で混乱するのではないか、うまく整理できないのではないか、効率が悪いのではないか、などとネガティブなことばかり頭に浮かんだが、しかし永安先生の空間で区分するという方法は、近年の脳科学研究の見地からも、大変に有効であることが分かってきている。AはXを行う空間、BはY、CはZ、という具合に、自らの脳に暗示をかけるのである。こうした空間や環境にアクセントの違いをつけることで、脳の活動の効率性が高まるという方法は、すでに永安先生はずっと以前から実行されていたのだ。私には、永安先生のようないくつも机を置くことのできる研究室のスペースや自宅に書斎があるわけでもないが、先生から教えられた、三つの仕事を同時並行して行うことを、チャレンジする姿勢は忘れないようにしている。「空間・環境」という要素に「時間」という要素を加えて、研究モードの転換や脳の効率性を高める努力をしてはいるものの、私には永安先生から更なるアドバイスが必要ではないかと最近感じている。

モラロジー研究所での研究生生活は、幸いにも、永安先生の研究室に隣接した部屋でスタートすることになった。先生と身近に接することから、多くのことを学んだように思う。短時間ではあったが、当時はほとんど毎日のように、応接室にあった新聞をはきんで、先生と雑談をした。先生が私に合わせてくださり、話題の多くは医療問題であったり、生命倫理問題のことだった。先生はピーチャム、ジェームズ・チルドレス著『生命医学倫理』（成文堂、一九九七）を立木先生と監訳されるなど、生命倫理にも造詣が深かったのと、先生ご自身の病気体験などから、話題が豊富であるとともに、問題意識の高さ、洞察力の鋭さに、私の思考能力のキャパシティを超えることも度々あったが、先生との会話からは多くのことを考えさせられた。

先生と身近に接して、大変に心地よかったのは、先生との会話の話題が刺激に満ち溢れていたことに加えて、先生の私への接し方も関係していたように思う。先生は研究者としてキャリアをスタートさせたばかりの若輩者の私の話を十分に聴いてくださった。私の意見に対して的確にコメントし、そして先生の学識と経験に裏打ちされた奥深い話を聞かせていただいた。今から考えると何と贅沢な個人レッスンだったのだろうかと思う。また先生は私の研究室まで、私の研究に関連するさまざまな資料、たとえば、新聞の切り抜きや、論文のコピー、研究会や講演会の案内、雑誌購読の案内、またある年の正月明けには、年末に生命倫理問題を取り上げたテレビ特番があったと録画したビデオを持ってきてくださったこともあった。平成十五（二〇〇三）年には、東海大学宇都木伸教授を中心に行われていた医科学研究倫理のプロジェクトである、厚生労働省厚生科学研究「ヒトゲノム・再生医療等研究事業」の班会議において、永安先生、立木先生と一緒に発表させていただく機会も与えていただいた。高名な先生方の前で話をする緊張もあり、会議前の昼食は、あまり喉を通らなかつたという思い出が残っている。その班会議での発表を契機として、その後も継続して班会議の先生方と研究会などを通してお付き合いさせていただいており、研究倫理研究の最前線の知見を得ることができるようになった。こうして振り返ってみると、胎児のような研究者であった私を、今まで紹介してきたような様ざまな形を通して、永安先生に育てていただいた。

平成十三（二〇〇一）年一月に初めて永安先生の研究室で長くお話をさせていただいた最後には、先生からご著書『政治経済学—グローバル時代のシステム論—改訂増補版』（成文堂、一九九〇）を頂戴した。先生に一筆お願いしたところ、先生は「慈悲寛大自己反省 虚心一志 右足一步左足一步」とお書きになった。先生の書を見つめると、未熟な自分に反省すべきことばかり思い浮かんでくる。しかし最後に書かれて

いる「右足一步左足一步」と言う言葉からは、地に足をつけて着実に前進しなさい、そうすることしか「慈悲寛大自己反省」の境地に到達することはできないのだよ、という先生からの厳しいけれども暖かいメッセージが心に響いてくる。永安先生から受けた多大な学恩に感謝し、一研究者として今後も精進することをお誓いする次第である。

永安先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。